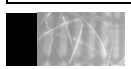


## 遺族の立場から

# 犠牲になった命を無駄にしないためにも 将来の地震被害を最小限にしてほしい



相澤 純

平成 23 年の冬。盛岡市内は、ほぼ例年と同じような師走を迎えていました。多くの人たちが、忘年会やクリスマスで街に繰り出しています。私も、例年通りの年末を過ごしていたつもりでしたが、奥さんの「今年のおせち料理はどうしよう？」の一言で、現実に引き戻されてしまいました。毎年、年末年始は陸前高田の実家に帰省して過ごしていたのですが、今年から実家という存在そのものが「消えて」しまったのです。



### そのとき

あの日のあの時、私は脳腫瘍患者の麻酔を担当していました。患者さんは比較的若く、循環動態も安定しており、不謹慎ながら、ちょ〜っと気が緩んでもいた、そんな時、部屋が、揺れ始めました。

あれ？地震かな？

でもまあ、地震自体は、そんなに珍しくありません。術者も手を止めて、揺れが収まるのを待っています。しかし、揺れは収まるどころか、だんだん大きくなっていきます。

「大きいぞ！」

誰からともなく声が上がったその直後、地鳴りとともに、さらに大きな揺れが襲ってきました。

「キャア！」

看護師さんの叫び声が上がります。私は反射的に椅子から立ちあがり、麻酔器の車輪をロックします。バッグに手をやり、部屋を見渡します。モノが落ちたりはしていませんし、倒れそうな揺れ方をしているものもありません。顕微鏡も無影灯も大丈夫に見えます。

直後、部屋の電気が 1 回切れて、非常用電源が立ち上がりました。この日の麻酔器には、たまたまバッテリーが搭載されており（当院手術室の麻酔器

の半数以上は、バッテリー未搭載でした）、ベンチレータの作動には問題はありませんでした。

しかし、マルチパラメータモニターは 1 回電源が切れて、再起動がかかります。こうなると、起動が完了するまで患者のバイタルがわかりません。本来であれば、患者の足背動脈を触って確認などをするべきなのですが、その時の私は院内配管が心配で、麻酔器のパイプライン圧を凝視していました。この時の麻酔器のベンチレータは空気駆動で、もしパイプライン圧が下がると酸素ポンペに切り替えた後に手動換気をしなくてははいけなかったのです。モニターの再起動完了。A ラインのゼロ点再校正をして血圧を確認。心拍数も含めた患者のバイタルに、変化はみられませんでした。

気がついたら、揺れは収まっています。パイプライン圧も大丈夫なようです。しかし、電源は非常用のまま。地震で電源がダウンしてしまうという経験は初めてでした。

幸いなことに、本来出張で不在だったはずの麻酔科教授（＝中央手術部長）が、たまたま予定が変更になって院内におり、教授を中心に①入室前の予定手術はすべて中止、②現在進行中の手術はなるべく早く終わるよう術者に協力してもらう、という方針がその

場で決定されました。

私が麻酔を担当していた手術も、腫瘍自体はほとんど取れていたもので、閉頭にかかります。頻回の、しかもそれなりに大きな余震のたびに手を止めながら、脳外科医は見たこともないような手際の手際で創を閉じていきました。無影灯や手術関連機器の電源は確保できていましたが、停電で空調がストップし、部屋はどんどん蒸し暑くなります。しかも、隣の部屋は人工膝関節全置換術。ほかにも脊椎の手術をしている部屋もあり、これらは清浄度が心配です。それに、自家発電がどれだけのつか、酸素がどれだけのつか、一切情報がありません。館内放送では、外来診療中止の件や、地震の規模が大きいことなど、素人丸出しのカミカミな放送が行われていました。

手術終了後ほどなく、患者さんは覚醒し、気管チューブを抜去して、全身状態の安定を確認しました。病棟からのお迎えは…、エレベーターが使えないのでありません。事務の男性職員や病棟・手術室の看護師たちと一緒に、担架で1階上のICUまで搬送しましたが、担架で階段を上るのがこれだけ大変だとは、まったく思っていませんでした（そもそも、こういう想定での訓練もしてませんでした）。

### 家族は、母は、 どうしているのか

担当の手術が終わって医局に行くと、テレビにはとんでもない光景が流れていました。宮古市の魚市場を映している定点カメラの映像では、市場が屋根まですっぽり水没しています。八戸市でも、コンビニの近くを車が流れてい

ます。それ以外の市町村にも、大きな被害があるようです。はては関東のコンビナートで、火災が発生しています。

なんとか電話がつながった盛岡市内の自宅は、食器が壊れた程度で人的被害はなかったとわかり一安心。ですが、陸前高田市内の実家が心配です。そこには、母が一人で暮らしているのですが、当然電話はつながりませんし、何より陸前高田市についての情報がまったく入ってこなかったのです。案の定、被害があまりにも甚大すぎて、情報そのものがなかったということが、後で判明しました。盛岡市では、携帯電話や固定電話はつながりましたが、関東では携帯電話より有効だったというPHSは、ほとんど使用できず。インターネットは中継サーバーが落ちているために大学外につながらず。iPhoneも、そもそも携帯の電波が不安定でイマイチ。情報が入らないということが、こんなにも不安だとは思っていませんでした。

夜の8時頃になって、最後の整形外科の脊椎手術も無事終了し、「このまま全員で医局にいても仕方がない」との教授の判断で、一人暮らしの先生数人を残して家族持ちは帰宅することになりました。ところが、帰宅もこれまた大変で、街は街灯や信号機はもちろん、ほとんどすべての明かりが消えて真っ暗です。たまたま走っていたタクシーに、自宅まではワンメーターの距離だったのですが、つつい乗ってしまいました。

自宅マンションも、エレベーターが止まっているだけならまだしも、ロビーも階段も真っ暗。携帯電話を明かり代わりにして、8階の自宅まで階段を

登ります。家の中は、かろうじて見つかった懐中電灯だけが頼り。で、家族は沿岸市町村に津波が押し寄せたことなどはまったく知らずにおりました。そりゃそうです。停電だとテレビも見られませんが、自宅にはラジオを聞く習慣もありません。せつかく、テレビでアナウンサーが「落ち着いて行動してください」と連呼していても、被災地の人のほとんどは、それを見ることができないのです。私が医局のテレビで見えた光景を家族に話しても、にわかには実感がわからないようです。

盛岡市の中心部は、ガスと水道は直後から使用できたのですが、自宅マンションの給水は電気がないとできないため、断水状態です。それで困ったのが、トイレ。特に、大…。「風水的によくない」という奥さんの意見で、風呂のお湯をその都度落としていたことが裏目に出てしまいました。さらに乾電池や食料など、非常時を想定した準備もまったくしていませんでした。せめてもの救いは、奥さんと子供みんなが無事でいたことです。

### 情報収集

翌日以降の岩手県の状況は、マスコミ報道などで皆様もよくご存知の通り、「沿岸地方が甚大な被害」「ガソリン、灯油、軽油、重油がないため移動ができず、暖房や自家発電にも不安が」「コンビニはじめ、ほとんどの店で商品がない」「医薬品や医療材料が入ってこない」という状況でした。しかし、盛岡市は翌日の夜には電気が復旧しましたし、地震自体の被害もそう多くなく、まだよいほうでした。岩手県は、

▼写真1



さすがに四国4県ほどの面積があるだけあって、地域によって被害状況に天と地ぐらいの開きがありました。酷い地域では、ライフラインどころか、本当に何もなくなってしまいましたから。

当初は、病院に患者が多数押し掛けてくることを危惧していましたが、手術になるような（あるいは、手術ができるような）患者は多くはなく、私は医局の先生方のご好意に甘え、職務を離れて母の安否確認をしていました。この時点では、まだ生きていたとも死んでいるともわかりません。

直接現地に入りたかったのはやまやまでしたが、道路がどうなっているのかなど情報がなく、また、ガソリンも車のタンクに残っている1往復分しかありませんでした。何より、私が現地入りしても、警察や消防、自衛隊の皆さんによる必死の救出活動の邪魔になることが目に見えていましたので、盛岡でできることから始めました。

まず、警察署に行方不明者の登録をします。しかし、陸前高田市を含む多くの市町村で、被害状況を取りまとめるべき役場自体が壊滅的な打撃を受け、機能が停止しています。また、あらかじめ指定されていた避難所にも被害を受けた場所が多く、結局、被災者は被害を免れた個人宅や集会所に避難して

いました。そうすると、行政側ではどこに誰がいるのか把握できず、公的な情報はほとんどありませんでした。Googleのパーソンファインダーも、現地の情報インフラが機能していないと現地からの情報発信ができないため、効果的ではありません。

そんななか大活躍したのが、岩手県のマスメディアでした。地元テレビ局各局は、それぞれの記者が足で現地に赴いた際、避難所ごとに名簿を取りまとめて、それをHPでどんどん公開していきました。また、それとは別に地元の新聞社も現地に入って行って、避難者名簿を公表していました。それまでは失礼ながら、地元の新聞を「読みたい記事がほとんどない」などと悪く言っていましたが、この時は現地に密着した最強の情報源でした。数時間ご

とに更新されるネットのそれら名簿情報を閲覧しながら、「この避難所にも母の名前がない」「ここにもない」と気をもみ、また一方で、岩手県警から発表される死亡確認者名簿を見ながら「ここにも名前がない」と喜ぶ日々です。

なんとか、どこかの個人宅などに避難していてくれれば

と願いながら名簿を見る日々を過ごしましたが、母の名前は見つかりませんでした。

## 現地入り

地震発生から1週間が過ぎた3月18日金曜日、陸前高田市の隣町、大船渡市にある県立病院の麻酔科の先生と電話で連絡がとれました。「現地に向かう道路は一部損傷があるものの、市内近くまでは行ける。安全靴があれば（釘を踏んでけがをする人が多いので、鉄板入りの靴は必須との話でした）、歩いて移動も可能」とのことでした。そこで、翌19日土曜日に意を決して、車で陸前高田市まで行きました。

地震から1週間がたって、かなり片づいた状態だったにもかかわらず、そ

◀写真2





▼写真3 がれきに埋め尽くされた陸前高田



▼写真4 高田小学校の桜



の悲惨さは目を覆うばかりでした。どれくらい悲惨だったかというところ…写真やビデオが趣味の私が、撮影しようという気にまったくならなかったくらいです。市の中心部からひと山超えた所にある集落でも、川を遡上した津波に襲われてガソリンスタンドの天井が壊されていました。

避難所にもなっている高台の中学校に車を停めて、歩いて市内まで下りていきます。大きながれきを避けながら道が造られていました。もともとの道路と位置が微妙に違っているうえに、目印になる建物が少ないため、時々自分がどこを歩いているのかわからなくなります。それでもなんとか、実家があった場所にたどり着き、その周辺でだけ何枚か写真を撮影しました。写真1は、陸前高田市で私の実家があった場所ですが、塀の一部しか残っておらず、おそらく高田松原から流れて来たのであろう大木が横たわっていました。写真2は、私の父が生前開業をしていて、父の死後、高田市のデイサービスセンターとして使われていた建物ですが、コンクリートの壁がぼろぼろになっています。もしここに人がいたら、絶対生き残ってはいないだろうということが、見ただけで納得できてしまいます。

市内をいろいろ歩きながら、埃っぽい街のなかで風の強さ（遮蔽物があり

ませんので）と生活感のない静けさだけが、妙に印象に残りました。1000人以上が集まり、最大の避難所になっていた高田第一中学校でも、母の新しい情報は得られません。市の防災対策本部にも向かいましたが、県警で登録した行方不明者の情報が市にはまったく伝わっていないので（後から考えれば、それぞれが横の連絡もなく作業を行っているのですから当然ですが）、あらためて市にも行方不明者として登録しました。

それから何度か、苦勞してガソリンを入手して（盛岡市内で営業しているスタンドの情報を得るのも大変なら、その行列に並んで給油するのも大変でした）陸前高田に向かいました。その頃は、もう生存者の名前はあらかた出尽くしていたので、遺体安置所を回ります。1体1体、いろいろなお遺体を確認しながら、母を探します。それを繰り返した4月1日、長岡に嫁いだ妹夫婦が岩手まで来て、一緒に安置所を回ったその日に合わせたかのように、母の遺体が見つかりました。身元のわかるようなものはすべてはぎ取られた状態でしたので、直接確認しないかぎり身元はわからなかったでしょう。私たち実の子供ですら、生前の写真を片手に見比べないと、本人だとは確信がもてませんでした。

辛い（そう、人が死んでいるのにお

かした話ですが、それでも現地では「よかったね」と言い合います）、私の母は発見されました。しかし、遺体との対面すら叶わない方が、今でも数多くいるのです。

## そして、今

後日、陸前高田市で出版された写真集の中に、私の実家が波に飲み込まれる瞬間の連続写真が載っていました。実は私は、3月12日の土曜日に実家を訪れる予定でした。もしあの震災が1日ずれて発生していたら、私もおそらく母と一緒にあの波に飲み込まれていたことでしょう。海岸からかなり離れたあんな場所まで津波が来るなんて、まったく想像だにしていませんでしたし、もし津波が来ても2階に逃げれば大丈夫だろう、と高をくくっていました。

東北に限らず、沿岸部に住んでいる方々のなかには、同じように思っている方は多いのではないのでしょうか。今回の震災を一つのフルスケールシミュレーションとして、同じことが関東、東海などで起きたとき、被害を最小限にすることができれば、犠牲になった命も無駄ではなかったということになるでしょう。

全国で、病院も含めた地域全体の防災対策が、よりいっそう充実することを願ってやみません。